

日本語母語話者におけるひらがなの特徴

池谷 知子[†]・枝松 奈美[‡]

神戸松蔭女子学院大学 文学部 日本語日本文化学科[†]・一般財団法人 日本国際協力センター[‡]
tikeya[at]shoin.ac.jp

Characteristics of Hiragana In Japanese Native Speakers

IKEYA Tomoko[†]・EDAMATSU Nami[‡]

Kobe Shoin Women's University Department of Japanese Language and Culture[†]

Japan International Cooperation Center[‡]

Abstract

本稿では、日本語学習者のひらがな習得の一助になることを目的として、日本語母語話者の手書きのひらがなを収集し、分析を行う。＜調査1＞では文として書かれた平仮名の特徴として、文字が中心揃えで書かれる傾向があることを明らかにした。＜調査2＞では1文字ずつ書かれた平仮名の平均値を出し、低く書かれた「い」「つ」、高く書かれた「う」「ら」を中心に分析した。その結果、文として書かれたひらがなと比較すると、個々に書かれた平仮名はバランスのとおり方、ひらがなの高さといった点で異なった特徴がみられた。

日本語学習者が日本語母語話者の手書きの文字を読むことを苦手とする理由を、「画数」と「字形」の観点から考察した。「画数」では教科書体より少ない（または多い）画数をもつひらがなが8つあった。特に、日本語母語話者の手書きのひらがなでは、「き」「こ」「さ」「り」は繋げて書く人はほとんどおらず、フォントとしては存在しているが、実際には使用されていないことがわかった。同時に「そ」「ゆ」は2つの形が半分ずつ存在した。

In this paper, we collected and analyzed the handwritten hiragana of native Japanese speakers with the aim of helping Japanese learners learn hiragana. In Survey 1, we found that hiragana written as sentences tended to be centered. In Survey 2, we analyzed the hiragana written one by one, focusing on the rectangle “い”, “つ” and the vertical “う” and “ら”. The results showed that compared to hiragana written as sentences, hiragana written individually had different characteristics in terms of balance and hiragana height.

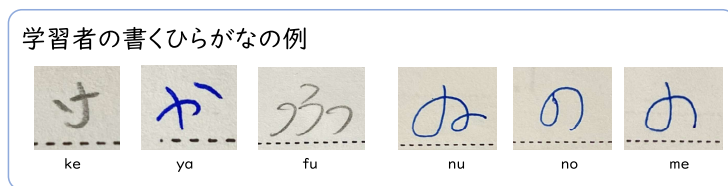
キーワード: 日本語学習者 困難 フォント 字形 バランス

Keywords: Japanese Language Learners; Difficulty; Character Shapes; Balance

1. はじめに

日本語学習者の書く文字には、その文字単体では何の文字なのか判読できない文字がある。内山（2017）は、これを「字形の逸脱」とした。「字形の逸脱」は、画数の多い漢字に限った話ではなく、ひらがなやカタカナといった一見シンプルな文字でも起こる。読み手が判読できなければ、いくら書き手が「あいます」「アリさん」と書いたつもりでも「あります」「マリさん」と誤って読まれてしまう可能性はある。加えて、「字形の逸脱」とまでいかずとも「字形の崩れ」もある。独特なバランスで書かれた「ふ」「や」「な」などを見たことがある日本語教師は少なくないだろう。表1は日本語学習者の書いたひらがなの例である。これらは特殊な例ではなく、日本語教育の現場ではよく見られる例である。「nu」「me」のように明らかに画数が足りない「字形の逸脱」は指摘しやすいが、「ke」「ya」「fu」のように独特なバランスで書かれた「字形の崩れ」を修正することはかなり困難である。

表1: 日本語学習者の書くひらがなの例



日本語教育の現場ではその文字が文脈によって理解できる場合、横に正しい形を示すのみに留まることが多い。そのため、書き順も含めて、一度化石化された崩れた字形はなかなか修正されることがない。また、もう1つの問題として、日本語学習者は「フォント」の日本語を読むことはできても、日本語母語話者の手書きの文字を読むことを苦手とする。それは普段、教科書で習っているフォントの文字と、日本語母語話者の手書き文字にかなり差があるからである。それは我々日本語母語話者が、英語母語話者の筆記体を読むのを苦手とするのに似ている。

そもそも、「字形の逸脱」や「字形の崩れ」とは、何を指すのか。本稿では、「ひらがな」そのものに注目し、調査する。まず、日本語母語話者からも筆記データを収集し、フォントのような理想的な文字ではなく、日本語母語話者が普通に書いた文字を調査しその特徴を明らかにする。

日本語母語話者の平均的なひらがなを明らかにすることで、日本語学習者は漠然とではあるがひらがなの許容範囲を知ることができ、手書きのみならず、「フォントによって読めない」という現象を改善するための手がかりとする。

2. 先行研究

まず、本稿で扱う用語を整理する。文化審議会国語分科会（2016）「常用漢字表の字体・字形に関する指針」では、字体、字形、書体を以下のように定義づけている。

字体: 基本となる文字の骨組みのこと

字形: 手書き文字、フォントを問わず、具体的に出現した個々の文字の形状のこと

書体: 文字に施された一定の特徴や様式の体系のこと（＝フォント）

印刷文字のフォントとして明朝体、ゴシック体、教科書体などが挙げられる

文化審議会国語分科会（2016）では、「文字に施された一定の特徴や様式の体系」を書体、またはフォントと定義づけているが、本稿では、印刷文字全般を「フォント」として扱う。

内山（2017）は、「字形の逸脱」を「標準的な字形に対してストローク（筆画）が変形されること」と定義づけ、「文字の読み取りに際し、誤読と不可読の基因となりうるもの」としている。本稿では内山（2017）の定義づけた「字形の逸脱」を、可読と誤読/不可読の観点から、「逸脱」と「崩れ」に分ける。（表2参照）。

表2: 内山（2017）「現代日本語のカナ文字の字形に関する小考」を基に作成

字形から字体の抽出ができる	
┌	意図された字体と一致する …… 可読
	意図された字体と一致しない …… 誤読
字形から字体の抽出ができない …………… 不可読	

小竹（2004）は、「文字の形は不安定に揺れ続け」るものとし、縦書きから横書きに転換する中での「字形的損傷」を「関係ストローク」という観点から考察している。関係ストロークとは「漢字や仮名に生じる文字連続の際の運動」であり、前の字の終止点から開始点までに生じる部分である。小竹（2004）は、「縦書き書式の中で生成された平仮名に残存する『関係ストローク』の部分に、横書きした場合、最も大きな損傷が生じるのではないか。」と仮説をたて、日本人の書く文字の字形の比較を行った。調査の母数が33名と少ないものの、縦書きと横書きで字形を比較すると、横書き時に「あ」の終筆部の「/」が消失したものが29名（約88%）で、「め」「の」にも同様の傾向が見られたと報告している。加えて、小竹（2004）は「字形的損傷が抱える問題」について、以下のよう問題点を挙げている。

… 文字が多様化すればするほど、…（中略）… 「文字は読まれてこそ機能を発揮する」という言語の機能性に反して、判別力を失うことは明らかである

だろう。…（中略）…現実に他者が書き記したメモを解読することもできないという多様化と、判別力の低下が生じているのではないか。この判別力の低下という現実こそが、字形損傷の抱える最も大きな問題点であることは間違いない。

このように、日本母語話者が自然に書く文字はある程度の「字形損傷」を伴っていることが指摘されており、我々が日常的に使用しているひらがなの字形は、理想的なひらがなの字形と異なっていることが指摘されている。このことは、日本語学習者においては、大きな問題になってくる。

3. 調査方法

調査は、日本語母語話者（以下、母語話者）45名に対して行った。属性として、回答者には性別、年齢、利き手を聞いた。回答者には許可をとり、個人が特定されないよう行った。女性の20代が多い母数となっている。

表3: アンケート回答者（母語話者）の属性（n=45）

性別		利き手		年齢					
男性	女性	右手	左手	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代以上
7	38	42	3	2	1	28	5	3	6
15.6%	84.4%	93.3%	6.7%	4.4%	2.2%	62.2%	11.1%	6.7%	13.3%

サンプルの収集は、＜調査1＞と＜調査2＞の2つのパターンで行った。＜調査1＞は短文を音で聞いてひらがなで書く、＜調査2＞はひらがなを一文字ずつ書く、の2段階で行った。＜調査1＞は2～3単語の短文の音声をも2回ずつ流した。なお、流した短文は、五十音すべて書いてもらえるように以下のように設定した。すべての文字が1回ずつではなく、複数回出てくる文字もある。

1. ひろいそら
2. とりのせわ
3. おさけをのむ
4. みちにまよう
5. あめでぬれた
6. ゆうめいなふね
7. おおさかにすむ
8. くつしたをはく
9. やきとりもたべる
10. へんてこなえほん

＜調査2＞では、五十音順にローマ字で書かれた音を1文字ずつ、ひらがなで記入してもらった。なぜ、2つのパターンで分けたかということ、1文字1文字書かれた場合と、横書きで連続して書かれた場合では文字のパターンが異なる可能性があるからと考えたからである。

回答用紙は＜調査1＞＜調査2＞のどちらも横書きで下線のみ補助線をつけ、筆記具の指定は行わなかった。（実際の回答用紙は表4参照のこと）

表 4: 回答用紙サンプル

<p>調査用紙(回答者用)</p> <p>筆記におけるひらがなの字形調査(復)</p> <p>本調査で得られた情報は、ひらがなの字形に関する調査で利用し、その他の用途に使用することはありません。本調査にご協力いただいた方には、下記にご連絡いたします。</p> <p><input type="checkbox"/> 日本語の授業の活用を許諾する</p> <p>神戸松蔭女子学院大学大学院 国際語文学専攻 松松香美</p> <p>調査の前に、以下のアンケートにお答えください。</p> <p>1. 性別: <input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性 <input type="checkbox"/> その他</p> <p>2. 年齢: <input type="checkbox"/> 10才未満 (才) <input type="checkbox"/> 10代 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代以上</p> <p>3. 母国語 (母語): <input type="checkbox"/> 日本語 <input type="checkbox"/> 他</p> <p>【調査1】 番号</p> <p>1. _____ (5文字)</p> <p>2. _____ (5文字)</p> <p>3. _____ (6文字)</p> <p>4. _____ (6文字)</p> <p>5. _____ (6文字)</p> <p>6. _____ (7文字)</p> <p>7. _____ (7文字)</p> <p>8. _____ (7文字)</p> <p>9. _____ (8文字)</p> <p>10. _____ (8文字)</p> <p>1/2</p>	<p>調査用紙(回答者用)</p> <p>【調査2】 ひらがなで書いてください。</p> <p>a _____ i _____ u _____ e _____ o _____</p> <p>ka _____ ki _____ ku _____ ke _____ ko _____</p> <p>sa _____ shi _____ su _____ se _____ so _____</p> <p>ta _____ chi _____ tsu _____ te _____ to _____</p> <p>ka _____ ni _____ fu _____ ne _____ no _____</p> <p>ka _____ hi _____ fu _____ he _____ ho _____</p> <p>sa _____ ni _____ su _____ se _____ so _____</p> <p>sa _____ ya _____ yo _____</p> <p>ra _____ ri _____ ru _____ re _____ ro _____</p> <p>ka _____ wa _____</p> <p>si _____</p> <p>2/2</p>
--	--

4. 調査結果

それでは、文として連続した書かれたひらがなを対象とする〈調査1〉と、一文字ずつ個別に書かれたひらがなを対象とする〈調査2〉について分析していく。


4.1. 〈調査1〉文として書かれた「ひらがな」の特徴

〈調査1〉において文として書かれたひらがなの特徴をみていく。文として書かれたひらがなの分析では、文頭の文字を基準にして、後続の文字の最上点と最下点をとり、その平均値をもとに分析している。(表5(p.6)参照) また、書かれた文字の水平さはあらかじめ回答用紙に引いておいた下線を基準にしている。

表5においては、文頭の文字を縦に10分割して数値を出している。数値「0」は文頭の文字である「と」と最上点や最下点が同じ線上にあることを示している。「+」は文頭の文字より大きい(最上点では高く、最下点では低い)位置にあることを意味し、反対に「-」は文頭の文字より小さい(最上点では低く、最下点では高い)位置にあることを示している。

なお、ここで扱うサンプル数は、まだ字形が定まっていない10代未満の筆記者のサンプルを除いた43である。短文9の「やきとりもたべる」は、「やきとりをたべる」と記入したサンプルのほうが多かったため、今回は「やきとりをたべる」を分析した。その

表 5: <調査 1 >における分析方法 (例: とりのせわ)

					
	と	り	の	せ	わ
最上点	0	+2	-2	0	+2
最下点		+4	+1	0	+1

サンプル数は「と」「り」が 34、「を」が 31 になったため、短文 9 のみ母数が異なる。

4.1.1. 揃え方

ここでは、文として書かれたひらがながどのようにバランスをとられているかを見る。表 6 は、短文 6 「ゆうめいなふね」の最上点、最下点の平均値を表している。上下の点線は、基準である文頭の文字「ゆ」の最高点、最下点の位置を示し、上下の赤線は各ひらがなの平均値を、中心にある太線は最上点と最下点から計算した中心点を示している。

表 6: 短文 6 「ゆうめいなふね」の平均値

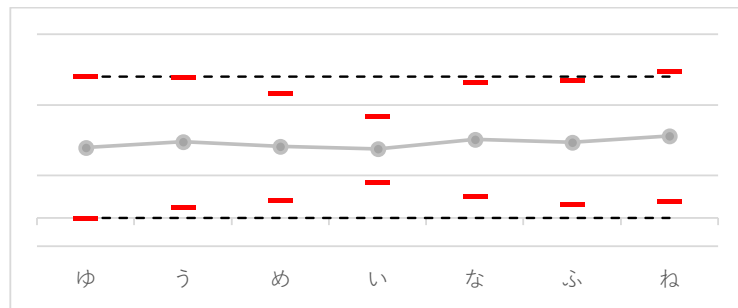


表 6 をみると、各ひらがなの平均値では最上点、最下点ともに浮き沈みはあるが、中心点を結んだ中央の線は変動が少なく、中心にそろっていることがわかる。表 7 は、最上点、中心点、最下点で一つ前の文字との差をグラフに表したもので、表 8 は、すべてのサンプルの平均値である。

表 7, 表 8 (p. 7) を見ると、一つ前の文字との差は中心点が最も少なく、次に最下点の差が小さい。特に表 8 で全サンプルの平均値をみると、中心点の差は 0.5 未満であり、ほぼブレのない中心揃えになっていることがわかる。表 5 で示したように、回答用紙には下線を引いてある。しかし、最下点より中心点のほうが前の文字との差が少ないため、母

表 7: 前の文字との差 (短文 6)

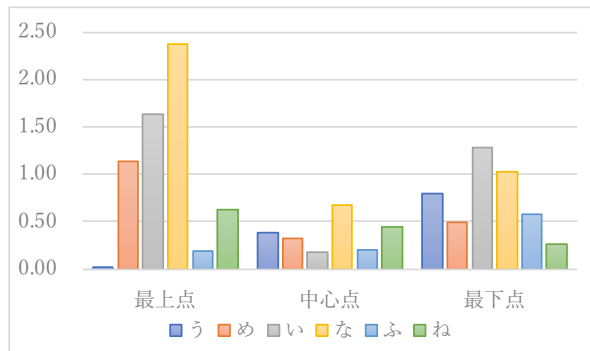
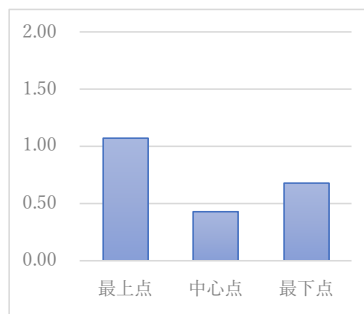


表 8: 前の文字との差 (平均値)



語話者においてはひらがなを書く際、中心にそろえようとする意識があると言える。

4.1.2. 高さ

次に、文頭の文字の高さを 10 とした場合の、後続の文字の高さの平均値を出し、その傾向をみる。高さは、濁点も含めたすべての点画の最上点から最下点までの高さとする。表 9 において、オレンジは最初の文字より 2 割以上高くなるもの、薄い青は 2 割以上、濃い青は 4 割以上低くなっているものを示している。

表 9 (p. 8) を見ると、文頭の文字より高くなるものより低くなるもののほうが多いことがわかる。特に「い」と「つ」は高さが文頭の文字のほぼ半分になり、かなり低くなる。短文 10 では「な」「え」「ほ」の 3 つが高くなったが、これは最初の文字「へ」がほかのひらがなと比べて低いひらがなであることが影響していると考えられる。短文 10 を除くと、高くなったのは「ら」(短文 1)「う」(短文 4) のみであった。高さにおいて、文頭の文字より高くなることは低くなることより許容されにくいと言える。

また、表 10 (p. 8) では、基準となる文頭の文字を除き、複数とれたひらがなの平均値を並べている。() 内は短文の番号である。例えば、「り」は短文 2 「とりのせわ」と

表 9: 文としての「ひらがな」における高さの変化

1.	ひ	10.00	ろ	10.65	い	6.42	そ	11.33	ら	12.60						
2.	と	10.00	り	10.70	の	7.23	せ	9.49	わ	11.14						
3.	お	10.00	さ	8.21	け	9.07	を	8.40	の	6.19	む	8.86				
4.	み	10.00	ち	10.14	に	8.03	ま	10.44	よ	8.93	う	12.47				
5.	あ	10.00	め	7.49	で	8.12	ぬ	7.95	れ	8.47	た	9.02				
6.	ゆ	10.00	う	9.19	め	7.56	い	4.65	な	8.05	ふ	8.81	ね	9.19		
7.	お	10.00	お	9.37	さ	8.42	か	7.49	に	7.09	す	10.93	む	9.21		
8.	く	10.00	つ	5.98	し	7.26	た	10.00	を	9.42	は	8.84	く	8.63		
9.	や	10.00	き	9.08	と	6.12	り	9.07	を	8.42	た	9.31	べ	7.40	る	8.65
10.	へ	10.00	ん	11.16	て	10.88	こ	10.00	な	13.16	え	14.49	ほ	12.60	ん	11.65

表 10: 複数のサンプルのあるひらがなの高さの比較

い	り	の	さ	を	む
6.42(1)	10.70(2)	7.23(2)	8.21(3)	8.40(3)	8.86(3)
4.65(6)	9.07(9)	6.19(3)	8.42(7)	9.42(8)	9.21(7)
				8.42(9)	
に	う	め	た	な	ん
8.03(4)	12.47(4)	7.49(5)	9.02(5)	8.05(6)	11.16(10)
7.09(7)	9.19(6)	7.56(6)	10.00(8)	13.16(10)	11.65(10)
			9.31(9)		

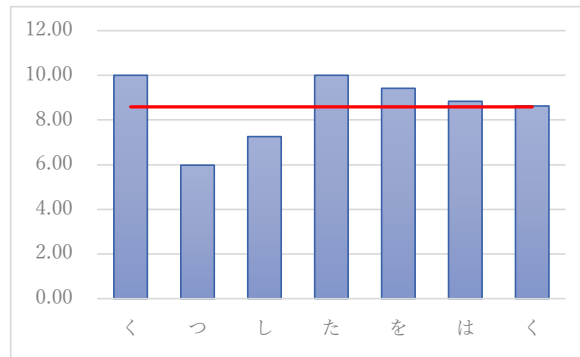
短文9「やきとりを食べる」に出てくるため、異なった文の2回分のサンプルを採集できた。それを見ると、「な」と「う」を除き、それぞれの数値に大きく差がないことがわかる。「な」は短文10の文頭の文字「へ」の影響だと考えられるが、「う」ではそのような影響は考えにくい。「う」は短文4「みちにまよう」では文末に書かれ、短文6「ゆうめいなふね」では文中に書かれている。(文末に書かれた方を濃い青で表示) この2つを比較すると、文末に書かれた短文4の方が大きくなっている、前述の表9において、文末の「ら」が高くなっていることを考えると、すべての文字ではないが、文中に書かれるか文末に書かれるかによって、高さに変化のあるひらがながあることがわかる。

4.1.3. 文末の文字

<調査1>では最後に、文末の文字に注目する。表11は文の各ひらがなの高さを表したもので、赤線はその文におけるひらがなの平均の高さである。

表11(p.9)のように、今回調査した短文の中では、文末が「ら」「う」になる短文1、短文4を除いて、文末の文字はその文のひらがなの高さの平均値とほぼ同じになった。しかし、文末の文字だけで平均をとると、その高さは10.14となり、文頭の文字の高さ

表 11: ひらがなの高さ (短文 8)

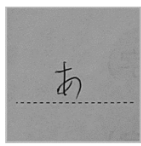

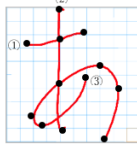


10 とほぼ同じである。文頭の文字に影響されるのか、文中の平均的な高さを文末の文字で整えているのか現時点では不明であるが、一度、低くなった高さは文末に向けて、また、文頭と同じくらいの高さになる意識があるといえるだろう。また、今回調査した短文は、表 9 の「い」や「つ」など低いひらがなが文末にくることはなかったため、その点においてもさらなる調査が必要である。

4.2. <調査 2> 個別に書かれた「ひらがな」の傾向

本稿では紙面の都合上、<調査 1> で特徴のあったひらがなについてのみ 1 文字ずつ書いてもらった<調査 2> での結果を述べる。<調査 2> では、収集したサンプルから、母語話者の書く平均的なひらがなを作成し、数値で示して文として書かれたひらがなと比較した。数値化する方法として、サンプルを一文字ずつ正方形に切り取り、座標に入れた。(抜き出したサンプルの筆者の性別はすべて女性で、その数は 30 である。) 傾きは補助線である下線を基準にし、筆記具の太さにより差が出ないように、同じ太さのペンで中心をなぞり書きした。書かれた平仮名の大きさが異なるため、縦は下揃え、横は中心揃えにして、縦横どちらかが最大値になるまで拡大してから、座標に落とし込んだ(表 12 参照)。座標は 10×10 のマスで作成し、その中心を $(x,y) = (0,0)$ とした。

表 12: サンプルを座標に入れるまでの手順

		
1. 傾きは補助線を基準とする	2. 中心でなぞり、字形を取り出す	3. 縦は下、横は中心に揃え、縦横どちらかが最大値になるまで拡大する

4.2.1. 「う」と「ら」

まず、文頭の文字が「へ」である短文 10 を除き、文頭の文字より 2 割以上高くなったひらがな「う」と「ら」の個別に書かれた平均を見る。母語話者の「う」「ら」の平均は表 13 の通りである。また、母語話者の平均的なひらがなと代表的なフォントである教科書体、明朝体、ゴシック体、メイリオとの比較を参考までに載せている。

表 13: 日本語母語話者のひらがなの平均（「う」と「ら」）

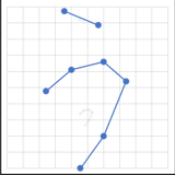
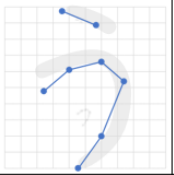
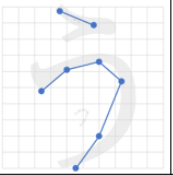
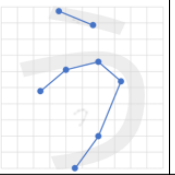
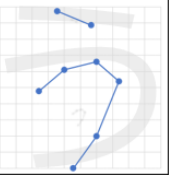
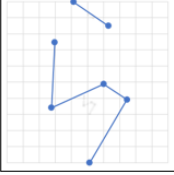
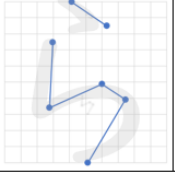
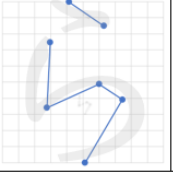
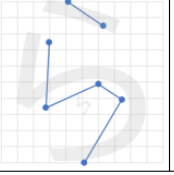
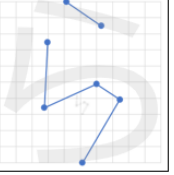
母語話者平均	教科書体	明朝体	ゴシック体	メイリオ
				
				

表 13 から数値を出すと、「う」の横幅は 5.0、縦幅は 9.7、「ら」の横幅は 4.6、縦幅は 9.9 と、どちらもほぼ 1:2（縦: 横）の比率となった。「う」「ら」は元来、縦に長く書かれる性質を持っており、4.1.2 で述べたように、文中に書かれるか文末に書かれるかで高さは異なり、文末の文字として書かれるとき、この縦に長く書かれるといった特徴がより顕著に適用される。

4.2.2. 「い」と「つ」

次は「う」や「ら」とは反対に、文頭の文字より低くなったひらがなをみる。紙面の都合上、ここでは文頭の文字と大きく（4 割以上の）差があった「い」と「つ」の平均値を見る。母語話者の「い」「つ」の平均は表 14 (p. 11) の通りである。

「い」はゴシック体以外の各フォントを見てもわかる通り、幅が広く、横に長く書かれるひらがなである。母語話者の平均においても低くなる傾向があり、その数値は縦 6.4、横 9.5 であった。高さはフォントよりも低く、似た点画をもつひらがな「り」との区別を高さで示そうとしている可能性がある。枝松（2021）では、「い」は幅が狭くなる、つまり高さがあると「い」と認識されにくくなり、「り」はその反対であると述べられている。そのため一文字ずつ書かれた場合でも、文として書かれた場合でも高さがあまりない「い」が書かれるのであろう。

最後に「つ」について述べる。「つ」も「い」と同様にフォントでは低く書かれ、教科書体では概ね 3:5（縦: 横）の割合で横に長く書かれている。連続して書かれた<調査 1

表 14: 日本語母語話者のひらがなの平均（「い」と「つ」）

母語話者平均	教科書体	明朝体	ゴシック体	メイリオ

>では文頭の文字と比較して、半分程度の高さになりかなり低く書かれた。しかし、個別に書かれた<調査2>における母語話者の平均では表14にある通り正方形に近くなった。その数値は縦8.8、横9.2であった。つまり、ほとんど低くならず、むしろふっくらしている。「い」と異なり、一文字ずつ書かれた「つ」と文として書かれた「つ」は、形（高さ）が異なるという結果となった。

4.3. <調査2>日本語母語話者のひらがなの形と画数

ここからは理想的なひらがなの字形を、フォントという点から考察する。日本語には様々なフォントがあるが、日本語を教えていると、上級の学習者であっても、フォントが違うためにひらがなが理解できないということがある。つまり、教科書体のフォントは読めるが、他のフォントになると、どの文字が書かれているかわからないという現象が起こるのである。

4.3.1. 日本語における「ひらがな」の形

学習者はフォントのようなひらがなを目指して学習をするものの、実際に母語話者が書いたひらがなはフォントとは異なるため、その許容範囲は曖昧なままである。加えて、同じひらがなであるが画数が異なる書き方があるひらがながある。本稿では、その中の「い」「き」「こ」「さ」「そ」「ふ」「ゆ」「り」の8つのひらがなについて分析する。教科書体を基準に、フォントによって教科書体の画数より少なく（または多く）、かつサンプル中に異なる書き方が認められたひらがなを「異なる画数の書き方が認められるひらがな」とし、その例を表15にまとめた。（）の数字は、該当のフォントの画数を示しており、教科書体と画数が同じフォントは灰色背景で表し、参考までに表内に入れている。

実際に使用したフォントは、教科書体は「UD デジタル 教科書体 NP-R」、明朝体は「MS P 明朝」、ゴシック体は「MS P ゴシック」他は「id-カナ」シリーズより、教科書体と異なる画数の書き方が認められるひらがなのフォントを選択した。

表15 (p. 12)を見ると、「い」「こ」「そ」「ゆ」は、教科書体、明朝体、ゴシック体とメ

表 15: 異なる画数の書き方が認められるひらがなの例

教科書体	教科書体より画数が多い/少ない例				
	明朝体	ゴシック体	メイリオ	他	
い (2)	い (2)	い (2)	い (2)	い (1)	
き (4)	き (3)	き (3)	き (3)	き (3)	
こ (2)	こ (2)	こ (2)	こ (2)	こ (1)	
さ (3)	さ (2)	さ (2)	さ (2)	さ (2)	
そ (1)	そ (1)	そ (1)	そ (1)	そ (2)	
ふ (4)	ふ (2)	ふ (4)	ふ (4)	ふ (3)	
ゆ (2)	ゆ (2)	ゆ (2)	ゆ (2)	ゆ (1)	
り (2)	り (1)	り (2)	り (1)	り (1)	

イリオの画数は同じである。反対に、「き」「さ」は表内であげたフォントすべてが教科書体より1画少ない。「り」についても教科書体とゴシック体以外はすべてつながった1画で書かれている。「ふ」に関しては、4画で書く教科書体に対して2画で書くフォントと、3画で書くフォントが認められた。

ひらがなも含め、文字導入の際には、書き順を重視する教師もいる。書き順を正すのは字形を正す目的もあろう。しかし、日本語母語話者であっても書き順が統一されているわけではない。書き順よりもその文字の形として認識できているかどうかが大切である。加えて、表15のように、手書き文字のみならず、フォントとしても画数が異なるひらがなが多数あり、先にも述べたように、フォントが異なると日本語が読めないという現象を引き起こす。このように、日本語母語話者にとっては、文字のバリエーションとして処理されるものが、日本語学習者の混乱をまねく恐れがある。

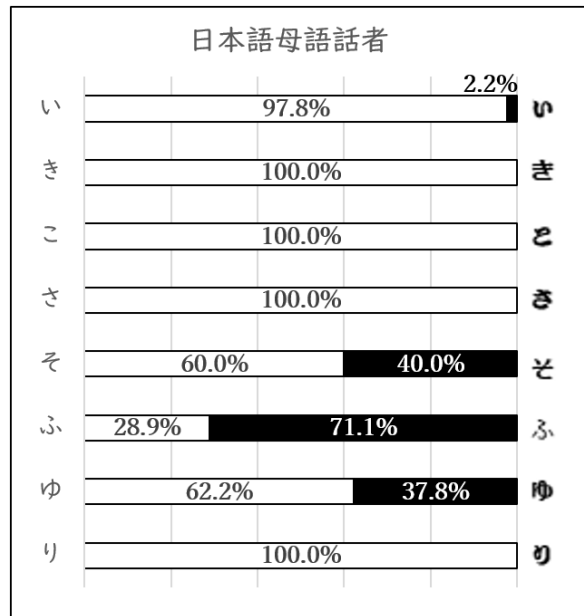
4.3.2. 日本語母語話者のひらがなの画数

母語話者がどのようなひらがなの字形を多く使っているのかを明らかにするため、表15においてバリエーションが確認された「い」「き」「こ」「さ」「そ」「ふ」「ゆ」「り」の8つのひらがなについて分析する。

表16 (p. 13) では、教科書体の画数より少ない（または多い）ひらがなの数を「多い/少ない」の列にカウントした。グラフの白が教科書体と同じ画数を表しており、黒が教科書体と異なる画数の割合を表している。

「き」「こ」「さ」「り」に関しては教科書体と同じ画数で書かれたものが100%であった。「い」に関しては繋がって書いた回答者が1名いたため、97.8%になっている。これらの結果から、「き」「こ」「さ」「り」に関しては、繋げて書くより、離して書くのが一般的だと言えるだろう。

表 16: 異なる画数の書き方が認められるひらがなの数とその割合



また、字形によっては、ゆれが出たものがある。それが「ゆ」と「そ」である。「ゆ」は教科書体のように最終画を離して書かれたものが62.2%、続けて書かれたものが37.8%であった。「そ」は教科書体のように1画目が水平に書かれたものが60%、ソのように書かれたものが40%であった。「ゆ」と「そ」に関しては、字形が定まっておらず、どちらで書いても問題がないと言える。

一番違いが出たのが「ふ」であった。教科書体の画数が4画である「ふ」を、3画で書く日本語母語話者は71.1%に上り、教科書体と同じ4画で書く日本語母語話者は28.9%であった。異なる画数の書き方が認められるひらがなの中で、日本語母語話者の書く「ふ」のみが教科書体の字形と大きく異なることが分かった。

このように、教科書体のフォントと日本語母語話者の字形と違いがあることがわかった。

5. まとめ

<調査1>では文として書かれたひらがなの特徴をみた。下線があるのにも関わらず書かれた文字は中心揃えになり、文頭の文字に比べて低くなるものはあるが、高くなるものは許容されにくいといった特徴があった。また、これは可能性ではあるが、文中に書かれるか文末に書かれるかで高さが異なるひらがながあることも示唆した。今回、特徴として挙げた点は管見において、日本語学習者のひらがな学習のための教科書や練習帳には載っていない。日本語学習においてひらがなを一文字ずつ書くのはその文字の導入時のみで、あとは文として書かれる。それを考えると、母語話者が文のどこで balan

スをとっているのか、どのように大きさを整えているのか、という観点も日本語学習においては必要なのではないだろうか。

<調査2>で高さに特徴があった「う」「ら」「い」「つ」について述べたが、「つ」以外は、一文字ずつ書かれた際の特徴が文に現れる傾向があった。しかし「つ」のように、一文字ずつ書かれたひらがなと文として書かれたひらがなに差異がある文字もあり、ひらがな導入の際に考慮すべき点としてこれからも調査を進めていく必要がある。

従来、理想的なひらがなというのが「適度な空間」や「適度なバランス」のような曖昧な基準で語られることが多かった。しかし、その「適度な」というのが日本語学習者にはわからないため、日本語母語話者の書く「普通のひらがな」の特徴を数値的に明らかにすることを目指した。また、これまで、ひらがなは1文字ずつ分析されることが多かったが、通常、ひらがなは文字列として文で書かれることが多い。そのため、個別に書かれた文字と、文として書かれた文字を同時に分析して、その比較を行った。今回は、サンプルが限定的であったので、今後、サンプル数を増やし、平均的な日本人の文字を明らかにし、日本語教育に還元していきたい。

参考文献

- 宇賀持綾子・荒川好子 (2020) 「入門レベルの学習差向けの仮名教材作成プロジェクトについて - 整った文字を書くスキルを習得させるために -」 『ICU 日本語教育研究』 17, pp.57-67, 実践・調査報告, 国際基督教大学 グローバル言語教育研究センター.
- 内山和也 (2017) 「現代日本語のカナ文字の字形に関する小考」 『別府大学日本語教育研究』 7, pp.43-47
- 枝松奈美 (2022) 「日本語母語話者のひらがな認識の弁別的要素」 「第10回異分野交流会報告書」 pp.6-8, 武庫川女子大学 女性活躍采女総合研究所 関西圏女子大学連携プロジェクト担当
- 枝松奈美 (2023) 『日本語学習者のひらがなにおける母語の影響』 神戸松蔭女子学院大学 大学院 国語国文学専攻 修士論文
- 小竹光夫 (2004) 「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」, 『書写書道教育研究』 18, pp.41-50, 全国大学書写書道教育学会.
- 小林夫宜子 (1980) 「入門初期のアメリカ人学生に対するひらがな指導の留意点 (報告)」, 『日本語と日本語教育』 9, pp.69-84, 慶應義塾大学国際センター.
- 中村栄子 (1999) 「字形を意識した平仮名・片仮名指導の一案」, 『文化外国語専門学校日本語過程紀要』 13, pp.43-80, 文化学園外国語専門学校.
- 林朝子 (2018) 「非漢字圏日本語学習者書字による平仮名の特徴 - 概形・筆脈を中心に -」, 『三重大学教育学部研究紀要』 第69巻, pp.91-96
- 林朝子 (2020) 「大学生書字による平仮名の特徴」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 第71巻, pp.51-57

参考にした文化庁ウェブサイト

文化庁（201）「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html（最終アクセス 2022/12/19）

文化庁文化部国語課（2015）「平成 26 年度 国語に関する世論調査」

文化審議会国語分科会（2016）「常用漢字表の字体・字形に関する指針」

Authors' web sites: <https://researchmap.jp/read0064389>

（受付日: 2024 年 1 月 10 日）